

## BOOKS

## 「ささやかだけれど、役にたつこと」

レイモンド・カーヴァー著 村上春樹訳(中央公論社 1989)

柳沼 朋美

レイモンド・カーヴァー(アメリカ人作家・詩人)が日本でよく知られるようになったのは、ここ十年くらいのことです。それは多分に、村上春樹さんによって彼の作品が翻訳されている、という事情によるものなのかもしれません。彼の小説は、ごく普通の日常生活の中で、本当に「よくある事柄」が描かれているだけなのに、つい、引き込まれてしまうのは何故か、読んだ人は必ずそう感じているはずだ、と私は思っているのです。実際のところはどうかのでしょうか?

この本は、彼の死後に翻訳されたもので、春樹訳の三冊目に当たります。表題作は、誕生日に交通事故に遭い、二日後に死んでしまった子供の両親と、その子供のパースティ・ケーキを焼いたパン屋との心の交流を描いたものです。ケーキを通して人々の幸せを機械的に作る孤独なパン屋の姿に、おもわず涙が出てしまいます。このほかにも、人間の喜怒哀楽を描いた作品が入っている短篇集です。

残念なことに、彼の新しい作品はもう読むことができなくなってしまいました。1988年ガンのために、なんと49歳の若さで亡くなってしまったのです。もし、興味を持たれましたら、同じ出版社の『ぼくが電話をかけている場所』、



『夜になると鮭は...』の二冊、または、現在刊行されている『レイモンド・カーヴァー全集』(全7巻だったはず)をお読みになり、今年の夏と秋をお楽しみ下さい。私も夏休みにアルバイトをします、この全集を買い揃えるために。また、彼に関する本や彼の詩集も、他の出版社から何冊か出ていますので、探してみるのも良いと思います。

それでは皆さん、頑張ってください。レイモンド・カーヴァーフリークになって下さい。(短大国文学科1年)



## 沢木耕太郎『深夜特急』1~3巻(新潮社)

石井美和子

大学に入って最初の年に読んだ。一応の内容は、著者が26~27才のとき1年間日本を脱出し、香港に立ち寄り、インドのデリーからロンドンまで長いバス旅行をする、というもの。ちょうどビートルズ等の影響でヒッピーがアジア各地に出没している時で、また日本はまだあまり「国際化」しておらず、日本人もそれほど海外に出ていない時期だった。だから、私が生まれた頃の世界の様子が書かれている、ということになる。しかし、古臭さは全くない。逆に新鮮にすら感じる。おそらくそれは、私自身まだ海外を歩いたことがないのと、何より内容の面白さ、奥深さ、だと思う。

何が面白いのか。まず、この旅がありきたりのツアーなどではなく、限りあるお金と自分の頭と体だけを頼りにした行きあたりばつりの旅であり、そして実際に著者が体験したことだということ。日本を出発してまず香港に向い、飛行機を降りたその足で宿を探し歩く。怪しい人にも出会うが、その時の勘を頼りに切り抜ける。以後の旅すべてがこの調子。自分だけが頼りの充実感。「私もこんな旅をしてみたい」と思われる。

しかし、ただ自由な旅の一駒一駒が描かれているだけではない。たくさんの人に出会う。生活力たくましい娼婦とその「ヒモ」のちよつと味のある関係、外国の孤児院で半ば奉仕で働く日本人のしかし単純でない心情、各地にたむろするヒッピーの意外に否定的な現実、働くのがあたり前の貧しさの中の子供たち。こうした異国の人々の日常との関わりを見つめながらの自由な世界旅行、その奥行の深さがまたとても魅力的なのだ。

本の内容に合わせてか、装幀もカッコ良く、目でも楽しめる。最近、文庫本になった。

(経営学部3年)